

当事者研究の研究と実践の螺旋的展開

Spiral development of a research and the practice of “Tojisha-kenkyu”

五十嵐 佐京
(Sakyo IGARASHI)

Abstract :

Tojisha-kenkyu was born in Urakawa Bethel's house in 2001. The people themselves concerned “research” it with friends and supporters. I practiced it with the research of Tojisha-kenkyu for conventional ten years. I researched Tojisha-kenkyu for 2013 through 2015 and utilized Tojisha-kenkyu by practice of the social work afterwards for seven years. I am thinking my social work practice to have had three time. With three time, there is it at the ① new face social worker era, ② service administrator era, ③ time of the new unit setup of the group home. The approach of Tojisha-kenkyu changed in a process to acquire experience of the practice, and the research and the practice did spiral development.

キーワード：当事者研究、パーソナル・リカバリー、研究、実践、循環

Keywords : Tojisha-kenkyu, personal recovery, research, practice, cycle

1. はじめに

筆者は2013年に大学院修士課程へ進学し、フィールドワークを行う過程において、当事者研究に関する研究を進める経緯となった。2015年に執筆した修士論文では、研究者として、ソーシャルワーカーが実践現場において展開する当事者研究に焦点を当て、まとめた。そしてその後、筆者自身がソーシャルワーカーとして7年間、障害福祉サービスの現場で当事者研究を行いながら実践してきた。実践者としては、修士論文でのまとめを現場で活かそうと模索しつつ、研究と実践が循環するように意識してきた。また、実践者として、筆者自身のソーシャルワーカーとしての当事者研究と実践を、省察しながら試行錯誤してきた側面もある。そして、当事者の知の活用を行いながら、専門的知識を当事者研究に取り込み、更にそれを当事者と活用し、実践報告を積み重ねてきた。故に、

複合的な循環があり、当事者研究を螺旋的に展開してきたと考えている。

本報告では、これまでの10年間、筆者が当事者研究を軸に行ってきた研究と実践について現段階におけるまとめを試みたい。そして今後の研究と実践の展開につなげていきたい。本報告の目的は、実践者が当事者研究を活用し、当事者が「自分自身で考え、仲間と共に生きて」いけるような応援をするための、取り組みの工夫等を提示することである。主にこれまで筆者が行ってきた実践報告と、実践の記録を基にまとめることにする。

ここで、当事者研究の定義を紹介する。当事者研究は、2001年に北海道の浦河べてるの家で誕生した。当事者研究とは、統合失調症や依存症などの精神障害を持ちながら暮らす中で見出した生きづらさや体験（いわゆる“問題”¹⁾や苦勞、成功体験）を持ち寄り、それを研究テーマ

として再構成し、背景にある事がらや経験、意味等を見極め、自分らしいユニークな発想で、仲間や関係者と一緒になってその人に合った“自分の助け方”や理解を見出していこうとする研究活動としてはじまった（当事者研究ネットワーク2020）²⁾ものである。

浦河べてるの家で始まったこのユニークな「研究する」という視点の取り組みは今日、全国的にも海外にもひろがりを見せている。また、ソーシャルワーク領域以外にも子どもから大人まで非常に多くの領域に拡大しており、関連する文献や映像等は多数公開されている。

2. 当事者研究の研究

（2013年4月～2015年3月）

筆者は、修士課程では研究者として、当事者研究の研究を行った。修士論文の研究目的は、べてるの家で誕生し発展してきた当事者研究を、精神障害者福祉施設においてソーシャルワーカーがどのように導入・展開させるのかを事例に基づいて明らかにすることであった。当事者研究は現在、ソーシャルワーク以外の多様な領域にも拡大しているが、当事者研究を最初に開始したのはソーシャルワーカーである向谷地生良（以下、敬称省略）と当事者である。そこでこの研究では、主にソーシャルワーカーを対象とし、当事者研究の現実的な有効性に焦点を当てて行った。論文の構成は大まかに、①浦河べてるの家の当事者研究：文献検討、講演会等への参加、べてるの家の見学等を行った。②ある事業所の当事者研究：フィールドワーク調査、インタビュー調査を中心に、資料等を用いて、この事業所の取り組みを総合的に捉えた。③当事者研究のひろがりとその担い手：文献検討、当事者研究全国交流集会への参加、当事者研究の参加観察やインタビュー等を行った。

当事者研究は、浦河べてるの家で誕生した“自分自身で、ともに！”をキャッチフレーズとして、当事者自らが仲間や支援者と共に“研究”するというものである。「研究」でもあり「活動」や「研究活動」、「プログラム」とも言える多様性がある。文献検討を実施したところ、向谷地は時期によって当事者研究の定義を変化させて述べていた³⁾。

また、様々な調査を並行的、循環的に行った結果、当事者研究は自由度が高いものであることが判明した。その理由は、文献や講演会、インタビュー調査において「当事者研究は好きなように始めて良い。構造化された方法はなく、あるのは『研究しよう』という方法的態度である」ことが度々述べられていたからである。そのため修士論文では、まずは当事者研究を導入してみることが良いと提案した。その上で、2015年時点で筆者が考えた、ソーシャルワーカーが精神障害者福祉施設において当事者研究をより有効に導入・展開させていくためには、①当事者研究の理念⁴⁾、②話し合いの大切さ、③商売の大切さ、④ユーモアの大切さ、⑤仲間の力、が大切であると述べた⁵⁾。

3. 当事者研究の実践と研究の循環

筆者のソーシャルワーカーとしての実践は、大きく3つの時期を経てきたと考えている。それぞれの時期の当事者研究を用いた実践や、取り組みの工夫を述べていく。

（1）新人ソーシャルワーカー時代

（2015年3月～2018年3月）

筆者は、2015年にべてるの家の理念を共有する事業所で、実践者として当事者研究を開始した。日常的には、グループホームの世話人として勤務を行い、月1～3回はフリースペースで当事者研究のプログラムを担当した。この法人では、多岐に渡る活動を展開しており、フリースペースは、任意団体における日中活動として行われていた。グループホームは、主に精神障害の方を対象とした障害福祉サービスの共同生活援助事業である。

筆者の修士論文での調査地の一つが、この事業所であった。また修士論文では、当事者研究は一プログラムに留まらず、生活全体において導入できると尚、有用であるという結論も述べていた。修士論文の調査においては、フィールドワークを実施した他の就労継続支援B型事業所で、当時その法人では通所の事業所のみの運営であったため、当事者研究が深まらない苦労がインタビューで聞かれた。一方、浦河べてるの家では、通所先も生活の場も仲間や支援者の

顔ぶれが同じであり、生活全体において当事者研究の視点や態度が土台となって、あらゆる活動が有機的に作用していた。そこで筆者は実践者として、当事者研究をグループで実施するプログラムとしてのみではなく、個別の相談や訪問等においても応用しながら活用してみようと試みた。

フリースペースで行ったプログラムとしての当事者研究では、似たような苦勞を持つ仲間につなげることや、自分の言葉で自分の情報公開を行う促しを、当時の筆者は特に意識していた。その頃にかかわっていたメンバーで、苦勞を他者に相談することができず、身体の痛みとなって表れる“現象”に困っていた方がいた。また、文献では、“弱さの情報公開”をしながら仲間とつながっていったプロセスを書いている当事者研究がいくつか見られた⁶⁾。更に、講演会等の機会では、自分の苦勞を情報公開して仲間とつながることが尊重されていることを学んでいたため、上記の2つを特に意識していた。そして、当事者研究のプログラムでは参加者1人1人が「今の気分」、「今の体調」、「最近良かったこと」、「最近苦勞していること」を自分の言葉で他者へ公開することから始めている。自身の状況を自分の言葉にして他者へ伝えることは、コミュニケーションの基盤である。考えていることを言語化し、仲間とつながるプロセスが重要であると常に考えていた。プログラムは1回2時間で実施しており、参加者はメンバーが毎回異なっていたが、毎回およそ15名程度が参加していた。ホワイトボードを用いたグループワーク形式で、笑いやユーモアや、「場」の力を大切にしていた。

グループホームの入居者とは、個別の当事者研究や、グループでの当事者研究、各種ミーティング、季節のイベントや日常生活との循環を常に意識しながら実践を模索していた。グループホームでのかかわりにおいて、当事者研究を支援の一つの方法として活用したと言える。“研究”とは、プログラムの1回のみで完結するのではなく、日常的な“研究”と“実験”の試行錯誤が重要である。そのため、生活全体において、研究的な態度や価値を活かすように意識していた。グループホームでは、部屋が隣同

士のメンバーを生活の仲間としてつなげるファシリテートも行った⁷⁾。更に、当事者研究の講演等でメンバーが講師として参加する機会を用いて、共に外出する工夫も行った。

この事業所には、メンバー、スタッフ、見学者はそれぞれ、当事者研究やべてるの家に関心がある人々が多く集合していたので、既にべてる用語が共有できており、ある程度は実践の土壌があったと考えられる。当事者研究の、問題や苦勞に対して視点を変え、笑いやユーモアにする特徴を活かすことができた。当事者研究の実践をしながら、浦河べてるの家のメンバーが出張するイベントに参加する際には、事業所のメンバーやスタッフと皆で、運営の手伝いや販売を行った。メンバーもスタッフも共に、イベントや研修等でべてるの家の学びを定期的に継続していた。

この頃の筆者は、修士論文の調査を基に、フリースペースでのプログラムとしての当事者研究と、グループホームでの当事者研究を活用した生活支援を、当事者研究以外の要素と循環させることを意識して実践していた。事業所自体が若いスタッフのチームであったため、新人の一ソーシャルワーカーとして、まずは当事者研究をやりたいように取り組んでみた。しかし後に振り返ってみると、ソーシャルワーカーとしての知識や技術の不足も多く、実践現場で日々発生する出来事に、振り回されながら対応していた時期でもあった。経験年数を少しずつ重ねると、現場での実践知が自分なりに積み重なっていく実感があった。

(2) サービス管理責任者時代

(2018年4月～2019年7月)

この時期、筆者はサービス管理責任者を務めながら、管理者も一時期兼務していた。そのため、組織運営等を複合的に考える立場となった。実践の軸としては、話し合いと仲間の力を常に心掛けており、それはスタッフ間でも共通の認識であった。(1)でも述べたこの事業所は、べてるの家の源流があり、路上生活者支援ハウジングファースト東京プロジェクトの一団体でもあった。これまで、それぞれの理念は大切に実践していたが、事業所として大切にしてい

いることについて具体的に考えてきた経緯はなかった。そこで2018年度には、現場から理念を作っていく理念年間とし、一年間スタッフとメンバーと共に試行錯誤の実践をする中で大事にしているキーワードを挙げていく“実験”を行った⁸⁾。

また、事業所近辺で開催された学会の全国大会2つに、メンバー、スタッフと共に参加し、販売も行った。べてるの家のメンバーが、学会で講演していたため、皆で参加しながら学ぶ機会も工夫して取り入れた。

サービス管理責任者の仕事においては、あるグループホーム入居者との個別支援計画作成で、本人の苦労を“共同研究”し“実験”を試行錯誤する中で、希望の研究と“実験”になっていった。そこでパーソナル・リカバリー志向を導入し、当事者研究の“苦労”や“病氣”に名前を付けて枠で囲む特徴と、人と環境の視点から本人らしさを活かすストレングスモデルの価値を組み合わせる試みを行った。

パーソナル・リカバリーは今日の精神保健医療福祉領域で重要な概念であり、精神疾患や障害は完全に治らないかもしれないが、自分らしく生きていく過程や旅に例えられることが多い。リカバリーは、「社会的リカバリー」、「パーソナル・リカバリー」、「臨床的リカバリー」に分類され、その中で近年は、本人が希望する人生の到達を目指すプロセスを重視するパーソナル・リカバリーの重要性が取り上げられている。パーソナル・リカバリーの構成概念はCHIME (Connectedness:他者とのつながり、Hope and optimism about future:将来への希望と楽観、Identity:アイデンティティ・自分らしさ、Meaning in life:生活の意義・人生の意味、Empowerment:エンパワメント) + D (Difficulties:生活のしづらさ・生きづらさへの対応) である⁹⁾。

この時期の筆者は、組織やチームとしての視点という意識を非常に強く持っていた。オープン・ダイアローグ¹⁰⁾ が日本に紹介され拡大していた頃であり、対話の重要性が盛んに言われていた。そのことから、現場においてスタッフとの何気ない日々の対話も大切にしていた。また、実践しながら、新たな専門的知識や当事者

研究の新しい情報についても学ぶ姿勢を重視し、皆で学会に参加する工夫も導入した。実践の年数が少しずつ積み重なる過程で、社会資源や人脈の広がりも貴重な財産となった。

筆者は、Rapp,C.A. & Goscha,R.J. (= 2014) の『ストレングスモデル』¹¹⁾ を、修士課程で学んだ後、何回か繰り返して学習していた。故に、筆者は当事者研究の研究と実践の軸がありつつも、地域におけるストレングスモデルの実践も常に意識していた。ストレングスモデルでは、個人のストレングス(熱望・能力・自信)と環境のストレングス(資源・社会関係・機会)があり、それらを掛け合わせることによって本人なりの生活の質が高くなると述べられている。また、本人自身が用いる言葉や、本人自身がどのように考えているかの視点が重要である。ストレングスモデルは、リカバリー志向であることを前面に打ち出していて、希望の存在が重要であるとされている。

その後に学んだSlade,M (2013) の「本人のリカバリーの100の支え方」¹²⁾ には、リカバリーの支え方の具体的な方法が提示されており、この文献も参考として自分の実践に取り入れてみることにした。「本人のリカバリーの100の支え方」では、1人1人の自分らしさや価値が大切にされ、人としてのリカバリーの考え方が核となっている。この文献から筆者の実践において特に意識して導入した部分は、以下の2つである。一つ目は、文献の1章で「人としてのリカバリーに役立つもの」として、「1 ポジティブな自分らしさを築く、2 『精神疾患』の経験を枠で囲う、3 精神疾患を自己管理する、4 自分の価値に合った社会的役割を得る」という記述がある。このうち2と3の「精神疾患」の経験を枠で囲み、名付け、自己管理をして病気を小さくしていくことは、当事者研究の“苦労”や“病氣”に名前を付けて枠で囲むことと一致している。加えて、ポジティブな自分らしさを作り膨らませていくことが重要であると認識し、ストレングスモデルと併せて実践に取り入れた。二つ目は、2章には「人間関係が一番大切」と述べられている。その記述から、パーソナル・リカバリーの構成概念であるCHIME (Connectedness:他者とのつながり、Hope and

optimism about future:将来への希望と楽観、Identity:アイデンティティ・自分らしさ、Meaning in life:生活の意義・人生の意味、Empowerment:エンパワメント)のC(Connectedness)が最も大事であるとより考えるようになった。そこで実践では、目の前の人との個別的なかかわりを丁寧に行うことを今まで以上に重視した。関係性が根底にあり、その後には何かをやってみようという動機等にも発展していくのである。

このような経緯から、筆者は当事者研究の実践だけではなく、当事者研究を取り入れたパーソナル・リカバリー志向実践を、次第に意識し出した時期であったと振り返っている。

筆者の新人ソーシャルワーカー時代は、メンバーと、個別やグループでのかかわりが中心であった。サービス管理責任者時代は、それに加えて、組織としてどのように当事者研究の姿勢を大切にできるかを深く考えるようになった。かかわりでは、これまでのように当事者の知の活用を重視しつつも、ストレングスモデルやリカバリー概念の専門的知識を導入し、メンバーと共同で“研究”や“実験”に取り組むことで“希望の共同研究”になっていった。

イライラして“爆発”することに苦勞していた入居者とは、以前から筆者は本人やメンバー、スタッフと“苦勞の研究”をしていた。「どのようなときにイライラしてしまうか」などの解明を行い、仲間の知恵を生活で“実験”してみる等、当事者の知を活用した方法を行っていた。その後、筆者はサービス管理責任者となり、本人と個別支援計画を一緒に作成することになった。この事業所で用いていた個別支援計画書は、「希望」を記入する欄が計画書の上に大きく占める書式であった。計画書を一緒に記入していく過程では、対話を重ね、次第に本人の希望を膨らませていく“研究”や“実験”を共に取り組んでいくようになった。本人の「就職したい」という希望の実現のために、イライラしたときには、苦勞を小さくする“実験”として、筆者と小まめな相談や連絡をやり取りするという方法を共同で行うことにした。その他にも、個人のストレングス(熱望・能力・自信)と環境のストレングス(資源・社会関係・機会)

を掛け合わせるストレングスモデルの実践を導入した。筆者はかかわりの中で、本人がパソコンの技術を上達させて就職したいという希望を持っていることを知ったので、当事者研究の講師として一緒に登壇する機会を用いて、パソコンで自分の当事者研究についての資料を作成していただいた。そして、リカバリーの構成概念であるCHIMEも意識しながら実践した。苦勞に名前を付けて枠で囲む当事者研究の特徴と、ポジティブ・アイデンティティを膨らませていくストレングスモデルやリカバリー概念を導入したことで“希望の共同研究”となっていったと言える。

その際、実践と理論の循環だけではなく、筆者のソーシャルワーカーとしての当事者研究と“実験”の試行錯誤という側面もあった。個別のスーパービジョンや、自分の記録による振り返り、職場でのPST(Professional Skills Training:支援者の当事者研究)を行いながら、実践での“実験”を繰り返した。

(3) 別事業所でグループホーム新規ユニットの立ち上げ(2019年9月～2021年8月)

2019年には、グループホームの新規ユニット開設に携わった。(2)までと同じハウジングファースト東京プロジェクト内の別法人への転職であったため、筆者は、以前から協力していたスタッフ達の会社への加入となった。この法人は、訪問看護事業を主軸に展開しており、対話実践を尊重する等、パーソナル・リカバリー志向であったと言える。その法人のグループホームで、新規ユニットの入居者募集や、交流室・事務所の備品を揃える一からのスタートに取り組んだ。

この時期は新型コロナウイルスが流行し始め、開所したばかりのグループホームという生活の場における支援で、未知で手探りの日常が続いた。7名の入居者は、精神科病院の退院先として入居した方達であり、かかわりの形成も全てが一からであった。入居したばかりのメンバー達は、コロナウイルスの影響で通所先デイケア等が閉所となったため、グループホームでほぼ毎日を過ごしていた。筆者は、この新規ユニットの専従ソーシャルワーカーという人員配

置であり、一人体制で勤務する時間や曜日も多くあった。

10年以上精神科病院に入院し、実家以外での生活が初めてであったメンバーは、生活の中で他者とうまく喋れなかったときに、その出来事を後で思い出して「薬を増やしてほしい、入院させてほしい」と訴え、洗剤を飲んでしまった。その時に、地域生活において他者とのつながりが少しずつ形成されていけば、自分の想いを言葉にして出していけるのだと筆者は考えた。また、あるメンバーは抗精神病薬の筋肉注射による副作用で困っていた。これまでは主治医の意見に従い自分の意見を言えなかったが、受診において主治医に相談してみる方法もあることを提案し、診察場面を想定して部屋で一緒に練習を行った。更に別のメンバーは、入居当初、生活にかかわる様々なことを「〇〇をやってください」と支援者へ依頼してくることが多かった。それを受け筆者は、一緒にやってみましょうと伝え、共に考え行いかかわりを大切にした。

そしてこの時、当事者研究という名称は使用しなかったが、交流室に大きなホワイトボードを購入し設置する工夫や、個別の対応時にイラストを描く等、これまでの当事者研究の研究と実践の結果を踏まえて行った。コロナウイルス対策のため、グループワークはほとんど実施することができず、主に個別での対応を行っていた。筆者は各メンバーと、生活の中での“実験”をひたすら共に行っていた。そして“実験”の振り返りを行い、今後の対処法を共同で考える当事者研究の要素を取り入れた。「部屋の物が盗まれる」と不安があったメンバーとは、鍵のかけ方の“実験”や、鍵に代わる安心な方法等を、本人と考えながら探っていた。更に、メンバーと歌を一緒に聴いたり、料理を2人で行うという、本人の生活の場におけるかかわりを深く行った。

また、コロナウイルスによる制限は多くあったが、7名の仲間の生活がどう変わっていくかの視点を大切にした。メンバーは同じタイミングで入居したため、通過型グループホームの卒業時期はほぼ同じ計画であった。入居メンバーの中には、似たような“幻聴さん”¹³⁾に苦労し

ている2人がいた。コロナウイルスの状況が一旦落ち着いたタイミングに、ホワイトボードを用いたグループワーク形式の当事者研究を行うことができた。

この時期の筆者の実践は、グループホームの新規ユニットにおいて、目の前のメンバーと個別のかかわりが中心であり、生活における“実験”を一緒に行っていた。そのため、当事者研究の実践ではなく、本人の生活の場におけるパーソナル・リカバリー志向実践に当事者研究の要素を導入したものに变化していったのだと考えている。ソーシャルワーカーとしては、精神科医療を長年受けてきたため受動的になっていると思われたメンバー達とのかかわりにおいて、生活者の視点を重視し、生活の中で自分なりに生きていくための応援を行っていた。

4. 考察

筆者は、修士課程で研究者として当事者研究の研究を行い、その後、当事者研究を行いながら実践してきた。実践の経験を積む過程で、当事者研究の取り組みが変化してきた。ストレングスモデル等の専門的知識も取り入れ、その人らしい生活を応援するパーソナル・リカバリー志向を意識するようになった。そして実践者として実践しながら、実践を言語化する積み重ねを行ってきた。

当事者研究の研究と実践は、まず、筆者が修士課程で行ったような研究者としての研究がある。そして、実践者としての当事者研究の取り組みによる研究がある。次に、実践者として、当事者研究を実践に取り入れ、当事者と共に当事者研究に取り組み活用するという実践がある。その過程を振り返り、筆者は実践報告として積み重ねてきた。また筆者の実践では、ストレングスモデルやリカバリー概念の専門的知識の当事者研究への取り入れという特徴もあると考える。更には、筆者自身の実践者としての当事者研究と“実験”の循環もある。

新人ソーシャルワーカー時代の3年間は、修士論文の結果から、個別の当事者研究やグループでの当事者研究、そして生活の様々な要素との循環を意識して実践していた。サービス管理責任者時代は、組織運営やチームとしての意識

が強くなった。助成金の仕組み等も把握し始めていたため、メンバーやスタッフと、団体での学会参加等の工夫をすることができた。メンバーとの当事者研究では、イライラして“爆発”する“苦労の研究”から、個別支援計画と一緒に作成することになったことをきっかけに、希望を膨らませていくパーソナル・リカバリー志向の“研究”や“実験”を共に取り組んでいくようになった。希望の実現のために、苦労に名前を付けて枠で囲み小さくする“実験”を一緒にを行い、個人と環境のストレングスを掛け合わせるストレングスモデルの実践も導入した。そして、筆者自身が実践を記録し振り返り、スーパービジョンや支援者仲間との当事者研究を重ねるという実践の“実験”を行ってきた経緯もあった。新規ユニット立ち上げでは、これまでのグループホーム実践で身に付けた知識等を総動員しながら、生活者の視点を特に大切にしかかわりを行った。コロナウイルスの影響があったため、個別の対応で“実験”を共にたくさん試みた。

ある一人のソーシャルワーカーの実践は、どの時代において活動したかによって、その時に出会った人や環境からの影響がある。この10年間では、オープン・ダイアログの日本への紹介と結びついて、当事者研究の定義自体も変化しており、当事者研究は対話実践の位置付けが強くなっていった¹⁴⁾。また、筆者の新規ユニット立ち上げの時期は、コロナ禍であったため、グループで行う当事者研究はほとんど実施することがなかった。もし仮にコロナ禍以前に出会っていたメンバーや関係者とのかかわりであったら、別の実践形式になっていたと予測する。そのような時期において、筆者自身の当事者研究を用いた取り組みは変化し、継続してきた。

本報告では、筆者が行ってきた当事者研究の研究と実践を言語化し、実践者が“自分自身で、ともに！”をキャッチフレーズとする当事者研究を活用する際の、筆者なりの取り組みの工夫を述べることができたと考えている。一方で本報告は、一ソーシャルワーカーのみの当事者研究の研究と実践報告であるという限界がある。また、今回まとめた当事者研究を活用した実践

が、具体的にどのようにパーソナル・リカバリーにつながったのかについては、筆者とかかわったメンバー達にインタビュー等で確認していないため、現段階においては実証されていない。パーソナル・リカバリーは本人の意味付けや物語が重要であるので、今後、メンバー達にインタビューし明らかにしていく必要がある。

このように本実践報告で言える限界はあるが、筆者は当事者研究の「研究しよう」という視点がパーソナル・リカバリーの役に立つ一つの方法的態度であると考えている。なぜなら、当事者が似たような苦労を持つ仲間や信頼できる支援者となつなぐことや、苦労に名前を付けて枠で囲む等、自分らしく生きていくために活用できる要素が当事者研究には多く盛り込まれているからである。故に、筆者は今後も当事者研究をその人それぞれに合う形として自在に応用しながら用いることができるよう、当事者と共に当事者研究の研究と実践を積み重ねていき、より1人1人のパーソナル・リカバリーの役に立つ当事者研究の方法を考えていきたい。

【参考文献】

- べてるしあわせ研究所 (2011). 『レッツ！当事者研究2』NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ.
- べてるしあわせ研究所 (2018). 『レッツ！当事者研究3』NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ.
- MC Median (2023). 『べてるスケジュールダイアリー』.
- 向谷地生良 (2009). 『技法以前—べてるの家のつくりかた』医学書院.
- 向谷地生良 (2012). 「ソーシャルワークにおける当事者との協働」日本社会福祉学会『対論 社会福祉学4—ソーシャルワークの思想』中央法規出版.
- 浦河べてるの家 (2005). 『べてるの家の「当事者研究」』医学書院.

【注】

- 1) 本文中に使用する「べてる用語」は、“ ”で表すことにする。
- 2) 当事者研究ネットワーク (2020). 「当事者研究とは—当事者研究の理念と構成—(向谷地生良)」(https://toukennet.jp/?page_id=56, 2023.10.1).
- 3) 浦河べてるの家 (2005: 3) は当事者研究について、「活動」とされている。向谷地 (2009: 90) は「プログラム」と書かれており、向谷地 (2012: 262-3) は「研究活動」となっている。
- 4) 15個の当事者研究の理念は、①「弱さ」の情報公開、②自分自身で、ともに、③経験は宝、④“治す(直す)”よりも“活かす”、⑤「笑い」のカーユーモアの大切さ、⑥いつでも、どこでも、いつまでも、⑦自分の苦勞をみんなの苦勞に、⑧前向きな無力さ、⑨「見つめる」から「眺める」へ、⑩言葉を変える、振る舞いを変える、⑪研究は頭でしない、身体でする、⑫自分を助ける、仲間を助ける、⑬初心対等、⑭主観・反転・“非”常識、⑮「人」と「こと(問題)」を分ける、である(MC Median2023)。
- 5) 五十嵐佐京 (2015). 「ソーシャルワーカーによる『当事者研究』の精神障害者福祉施設への導入と展開」上智大学学位論文。
- 6) べてるしあわせ研究所 (2009). 『レッツ！当事者研究1』NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ。
べてるしあわせ研究所 (2011). 『レッツ！当事者研究2』NPO法人地域精神保健福祉機構・コンボ。
- 7) 五十嵐佐京 (2019). 「当事者研究の実践事例：べてぶくろの当事者研究をもとに」『精神保健福祉』50 (2), 180-185.
- 8) 五十嵐佐京 (2019). 「べてぶくろの取り組み：『浦河べてるの家』の源流と路上生活者支援『ハウジングファースト東京プロジェクト』の融合」『コミュニティソーシャルワーク』23, 15-22.
- 9) 国立精神・神経医療研究センター (2021). 「リカバリー」(<http://www.ncnp.go.jp/nimh/chiiki/about/recovery.html>, 2023.10.2).
Deegan, P.E. (1988). Recovery: The lived Experience of rehabilitation, *Psychosocial Rehabilitation Journal*, 11 (4), 11-19.
Anthony, W.A. (1993). Recovery from Mental illness: The Guiding Vision of the Mental Health Service System in the 1990's, *Psychosocial Rehabilitation Journal*, 16 (4), 11-23.
- 10) macklertranslations. (2014) 「『オープンダイアログ』フィンランドにおける精神病治療への代替アプローチの『開かれた対話』 Open Dialogue, Japanese subtitles」(https://www.youtube.com/watch?v=_i5GmtdHKTM, 2023.10.1).
- 11) Rapp, C.A. & Goscha, R.J. (2012). The Strengths Model 3rd edition, Oxford University Press. (= 2014, 田中英樹監訳『ストレングスモデル第三版—リカバリー志向の精神保健福祉サービス』金剛出版).
- 12) Slade, M. (2013). 「本人のリカバリーの100の支え方」(<https://plaza.umin.ac.jp/heart/pdf/160927.pdf>, 2023.10.1).
- 13) べてるの家や当事者研究では、「幻聴」に“さん”をつけて、親しみを込めて呼んでいる(べてるしあわせ研究所2011)。
- 14) 向谷地生良 (2021). 「第8章 伴走型支援と当事者研究」奥田知志・原田正樹編『伴走型支援』有斐閣。